『信愛紀要』別刷
（和歌山信愛女子短期大学）
2020年　第61号

教育現場で行われている表現に関する実態調査と領域の内容に関する考察

今西香寿
野村真弘
種田葉子
石川裕子

教育現場で行われている表現に関する実態調査と領域の内容に関する考察

A consideration through the survey of expression at kindergartens and nursery schools and the contents in the training course

今西香寿　野村真弘　種田葉子　石川裕子

Imanishi Kazu Nomura Masahiro Taneda Yoko Ishikawa Yuko

要　約

生きていく上で表現をすることは必要な事である。表現力の基盤は人格形成がなされていく幼児期の経験が大きく影響し、表現方法を身につけるには、様々な体験や経験によって培われていく。保育現場において行事を行うことは子ども達にとって体験や経験の場でもあるが、表現の場でもある。しかし、行事における表現は子ども自身からの表現ではなく、保育者に「やらされている」「させられている」姿になっているのではなかろうか。そこで、保育現場の行事において保育者が子どもに対し、何に気をつけ、またどのような表現の経験が必要かを明らかにするために保育者を対象にアンケート調査を行った。結果、保育者は行事において、子どもが行事に取り組む姿を大切にし、様々な経験を通して、自信がつき、子どもの表現が豊かになることを期待している。また、行事を準備するにあたり、子どもをよく観察し、子どもの意見を取り入れながら、表現活動が楽しめるよう取り組んでいることが分かった。

1. 問題の所在と目的

人は生きていく上で、何かを表現をすることはとても必要なことであると考える。自分の考えたことを言葉で伝えること、形に表すこと、身体や表情で表すことによって、相手との関係性ができてくる。清水(2019)は、『「表現力」は、幼児の思考力や判断力が発揮され、人に伝わっていくためにも必要な力であり、また幼児が人間として生きていく上で相手や様々な人に対しての思いをどう表現するか、伝えていくかということはコミュニケーション能力の育ちにもつながっていく。コミュニケーション力が低下している現在において、子どもたちの表現力を育てることが重要である。』と述べている。表現力の基盤は人格形成がなされていく幼児期の経験が大きく影響すると考えている。表現をするためには、さまざまな体験や経験によって表現方法を身につけていくものであろう。2017 年に改訂した保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「表現」のねらいは以下のとおりである。

①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ
②感じたこと考えたことを自分なりに表現して楽しむ
③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむと示されている。

自分らしく表現をすることは日々の生活の中での経験によって培われていくものであると考えられる。子どもたちが様々な経験をできるように、保育者による生活の環境づくり、また、保護者は子どもの表現を見て組み取る力、そして受け止める力が必要である保護者の役割は重要である。しかし、保育現場において子どもが表現をすることより、保育者側の思いが強くなっているのではないであろうか。例えば、運動会や劇発表会など、行事が行われるときは、子ども自身からの表現より、いかに上手に「見せる」ことが重要視されているという場面

もありうる。鈴木、吉永ら(2018)は、『運動会や発表会に向けて、楽器や劇の練習を熱心に行うことによって、子どもも保育者も行事の準備や練習に追われ「やらされ」「やらす」楽器や劇の練習が続く。子どもの保育における「表現」で大切にしたいことは運動会や発表会などでの作品の出来栄えではなく、保育者は、子どもの心の動きを見取り、表現しようとする意欲や表現する過程を大切にし、子どもが自己表現を楽しめるよう工夫していく。』と述べている。また、堂本(2018)も、『生活発表会の取り組みについて、子どもが自由に伸び伸びと表現する姿を理想としながらも、最終的には保育者が台詞を伝えどのように動くかを指示する取り組みも少なくはない。大人が描く劇の完成系があり、そこに近づくことが目的となってしまい、子どもは、保育者の思いを感じ、汲み取ろうとし、いつの間にか保育者がしてほしい動きや言葉を「させられている」姿になってしまう。』と述べている。本研究では、保育現場において、どのような表現活動が行われているのかを調査し、その際に子ども自身が表現することにおいて保育者はどのような関心を持っているのか、また、子どもたちにとってどのような表現の経験が必要であるかについて調査を行った。

2．調査方法

2－1. 調査対象及び時期

大阪府阪南市にて行われた公立保育所・幼稚園に務める保育士・幼稚園教諭への研修会に参加した受講者(幼稚園教諭16名、保育士4名)を対象とした調査を行った。該当の調査は令和元年11月26日に実施した。

2－2. 調査内容

年齢、職種、保育歴・教育歴、保育園や幼稚園で行われている行事、それらの行事において保育者としてどのようなことに気をつけているか、行事の準備にあたり、子どもが考えた発想を取り入れているかどうかをアンケート調査し、各園での行事において、どの程度、子どもからの発想に基づいて計画が行われているかを、保育歴別に取り上げた。また、保育者は子どもにとって必要な表現の経験をどのように捉えているかについて調査を行い、それについての考察を加えた。

3．結果と考察

3－1. 調査対象者

調査対象の内訳が表1である。保育歴では、5年以上10年未満の保育歴、教育歴の保育者が最も多く、続いて10年以上、5年未満の保育経験の順となった。幼稚園に勤務している保育者が最も多く、続いて保育士となった。

		仕事		
		幼稚園教諭	保育士	合計
保育歴	5年未満	1	2	3
	5年以上10年未満	8	2	10
	10年以上	7		7
	合計	16	4	20

表1　調査対象の内訳

3－2. 行事において、保育者として気をつけていること

現場の保育者が様々な行事において保育者として気をつけていることを表したものが図1である。保育歴5年未満の保育者が、様々な行事において保育者として気をつけていることは、「発達に合わせた体験」「関心や興味を知る」「個性を伸ばす」「子どもの表情が豊かになること」が最も多い結果となった。行事を特別なイベントとして捉えるのではなく、保育者が子どもの様子をよく観察していることが伺える。

保育歴5～10年未満の保育者が、様々な行事において保育者として気をつけていることは、「自信に繋がる体験」が最も多く、続いて「表情が豊かになる」という結果となった。保育歴10年以上の保育者においても同様の結果となった。保育経験を重ねるにつれ、自信に繋がる経験があるからこそ、今後子どもの表現力が豊かになると考えているのではないか。また、10年以上の経験を持った保育者はそれぞれの回答項目が分散していた結果となった。子どもにとっての経験の重要度は、特定の経験に縛られるものではなく、全ての経験が子どもに必要ととらえているのだという結果を見ることが出来る。

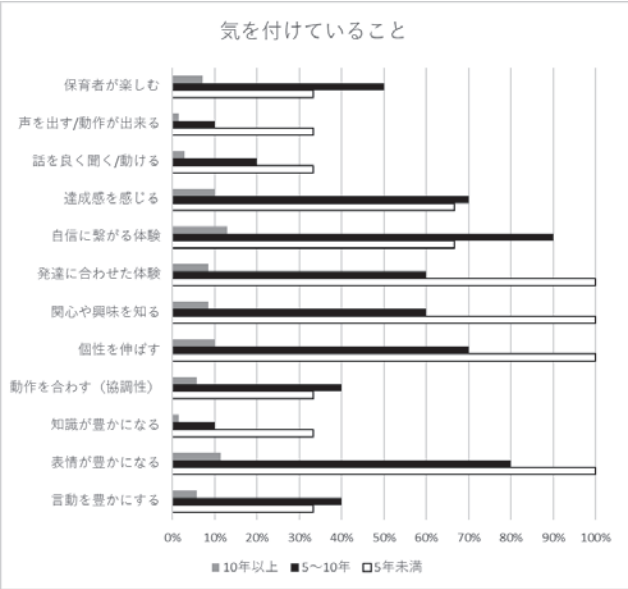

図1　行事において保育者として気をつけていること

3―3. 行事の準備をするにあたって、子どもが考えた発想を取り入れることがあるか

行事の準備をするにあたって、子どもが考えた発想を取り入れることがあるかを表したものが図2である。保育経験が短い、長いは関係なく、子どもが考えた発想を取り入れることが最も多い行事は、生活発表会であった。そのため、生活発表会では、保育者は子どもが表現活動を楽しめるよう、子どもの意見を取り入れることを意識して、行事を行っていることがわかる。生活発表会においては、保育者が考えた内容を行うばかりではなく、子どもの考えた発想も取り入れながら、一緒に創意、工夫をしているのだと考えられる。このきっかけによって、行事後の表現活動に対する子どもの取り組む姿勢も変わるのではないかと考えられる。ほかにも、「運動会」では、筆者の体験として園の実技指導に伺った際、保育者は子どもの意見を積極的に取り入れ、子どもの意見によるダンスの振り付けを行っている場面があった。等の経験があることから、図2でみられる「運動会」の項目において、子どもの意見の取り入れが行われている率が30％前後～60％の値で留まる結果が示されたことは意外な点であった。「作品展」に関しては、園の行事として執り行っていない園もあり、低い値となったことが示された。また、「音楽会」では演目の内容や、子どもが担当する楽器選びなど、子どもの意見を取り入れやすい状況があるだろうと予想できるのだが、実際は10年以上の経験を持つ保育者が60％、5～10年の経験を持つ保育者が40％と、相対的に高い結果とはいえない。特に、「誕生日会」も合わせて、5年未満の経験である保育者は0％であり、これらの行事においては、なかなか子どもの意見が積極的に取り入れられている状況だとはいえないであろう。

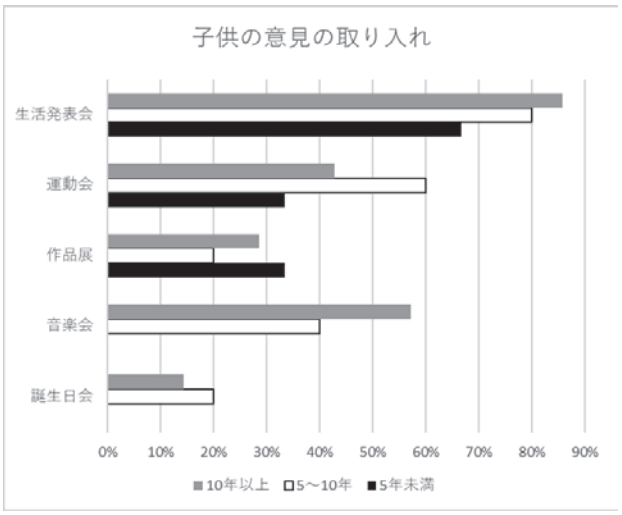

図2　子どもが考えた発想を取り入れたことがあるか

3－4. 子どもにとって必要な表現の経験

保育者が子どもにとっての必要性を感じる表現方法を表したものが、表 5 である。保育歴 5 年未満の保育者が最も子どもにとって必要性を感じる表現方法として、「物を作る」、「絵を描く」、「体を使って遊ぶ」、「演奏する」、「歌う」が多く挙げられていた。一方で、低い値となったものは、「文章を書く」であった。また、保育歴5～10 年未満の保育者が最も子どもにとって必要性を感じる表現方法として挙げていたのは、「絵を描く」、「体を使って遊ぶ」である。一方で、低い値となったものは、同様に「文章を書く」であった。そして、保育歴 10 年以上の保育者が最も子どもにとって必要性を感じる表現方法と挙げたのは、「体を使って遊ぶ」、続いて「手遊び」であった。一方で低い値となったものは、同じく、「文章を書く」であった。文字に触れる経験の乏しい子どもたちにおいては、文章について取り上げる内容は保育者自身において特別さを感じられないであろうと仮定し、ここではそれについての言及は避ける。そのため、ここでの考察は、身体・音楽・造形についての考察に内容を絞ってみていきたい。まず、保育歴5年未満の保育者が子どもにとって必要性を感じているものが「物を作る」、「絵を描く」、「体を使って遊ぶ」、「演奏する」、「歌う」と、他の保育歴をもった保育者と比較して満遍なく分布していることがわかる。それに対し、「役を演じる」、「踊る」、「手遊びをする」という表現方法はやや少ないながらも、これも満遍なく揃っていること

がわかる。調査対象のなかでは、短期間の保育歴であることから、表現方法として挙げられているあらゆる手段の内での個人内での優劣が付きにくい状態であるのではないかと考えられる。その点5～10年間の現場経験を得るにあたり、挙げられた表現手段の中でも特に重要だと思う手段について内容が深まっているという結果として見ることは出来ないだろうか。また、10年以上の保育歴を得た保育者では、5～10年の保育歴を持った保育者より頂点のなだらかな分布が示されている。しかし、「役を演じる」、「演奏する」の項目において、他の保育者より低い結果が現れることとなった。役を演じるにしても、演奏の活動を行うにしても、各園では代表的な活動なのではないだろうか。そのうえで、このような結果が示されることは意外であった。今後の研究を通して、その内容について踏み込んだものを調査してみたい。

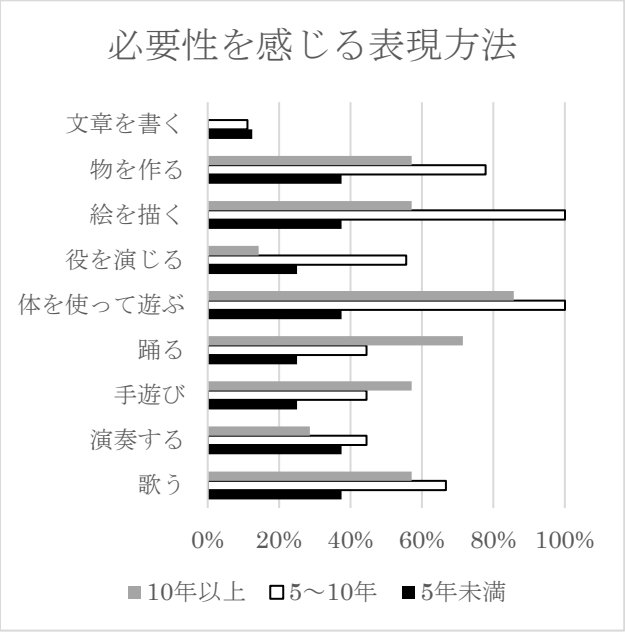

図3　子どもにとっての必要性を感じる表現方法

アンケート調査の際、必要性を感じる表現方法を取り上げるにあたり、それぞれの理由についての自由記述をしてもらった。その内容が以下である。

全ての経験から、子どもたちが好きな事ができ、将来の成長につながる。好きな事・苦手な事を通じて、精神的にも成長していくと思うから。
自分の考えた動きや、気持ちを体や声を使って出してほしいから(表現して)。
子ども一人ひとり表現する強み、自分の強みが違うと思うので、それ　を保育者として見つけ出してあげられるように、色々な経験が必要だと思うから。
好きな事を見つける題材が、体を動かしたり、物を作ることかと思うので。
体を使って遊ぶことで心もほぐれて、表現が豊かになるから。自分がイメージしたことを表現できるようになるためには、経験が必要だから。
体を鍛えたり、色々なことにチャレンジすることは、とても大事だと思うから。
体や手先を使って遊ぶことは、全ての表現と繋がっていて、言葉が自然と出て、友達と関わる力になるから。
全ての経験を子どもが楽しんで出来ることで、表現の豊かさが広がると思うから。どれか、ひとつに偏るのではなく、色んな経験をすることが大切だと感じるから。
話せない子、体を動かしにくい子、それぞれいると思うので、どの子もある程度できそうなものを選んだ。
一人ひとり好きな事、得意なことが違うので全てに〇を入れた。子どもの自信を育てるためには、好きな事を伸ばし、自ら表現出来るようにしたい。
歌うことにより、子ども達が楽しく、声の強弱のつけ方、耳の発達、様々な事に繋がっていくと思う。また、幼少期の運動により、体の柔らかさ、運動力が変わると思うから。
体を動かしたり、手先の使う遊びをすることで、体の基礎に繋がると思うから。
幼児においては、五感を使って感じ、表現することが大切だから。
様々な表現活動を経験することで、自分なりの表現の仕方を身に付けることができ、心も体も豊かになっていくから。
子どもが意欲的にやりたい。という気持ちが、まず大切だと思う。やりたい気持ちが、体を動かしたり、歌として声になり、遊びなど、表現したい気持ちへ繋がっていくと思う。作ったり、楽器なども、そのあとについてくると思う。
表現する経験は、様々ある方がいいと思う。上手い、下手ではなく、その子自身が楽しんで、取り組めることを見つけられるようにしたいと思うから。

様々な経験をさせてあげたい。自分の得意を知ることで自信に繋がる。

上述のコメントから、子どもには様々な経験をしてほしいという思いを持っている保育者が多いことがわかった。また、保育者は「子ども一人ひとり表現する強み（…）」や「一人ひとり好きな事、得意なことが違う（…）」、他にも「その子自身が楽しんで、取り組める（…）」等、子ども一人ひとりの個性を大切にしていく必要性を感じていることが伺える。しかし、表現を豊かにすることが目的ではなく、「色々な経験が必要（…）」や、「様々な経験をさせてあげたい（…）」等のコメントからわかるように、様々な経験を通して、子ども達に自信をつけてほしいとの願いが伺える。そうであるならば、人前で発表をする等の行事は、1つの経験であり、それが自信に繋がることこそが大切に扱われているのだろうと見ることもできる。今後、子どもにはそのように培った自信を、自分なりの表現として表出していってもらいたいとの願いとして見て取ることも出来るのではないだろうか。

Ⅳ、まとめ

本研究では、保育現場の行事において、保育者がどのようなことに気をつけ、また、子どもにおいてどのような表現の経験が必要かを明らかにするために調査を行った。アンケート調査を用いて保育者が様々な行事で気をつけていることについて回答を得た。結果、保育歴 5 年未満の保育者は、「子どもの発達に合わせた体験であること」、「子どもの関心や興味を知る」、「個性を伸ばす」、「子どもの表情が豊かになること」を心がけていることが分かった。保育歴 5 年～10 年未満の保育者は「自信に繋がる体験」、「表情が豊かになる」ということを心がけていることが分かった。そして、10 年以上の保育経験をもつ保育者は 5 年～10 年未満の保育者と同様の結果ではあるのだが、全体としてそればかりを気にかけているということではなく、全体が満遍なく分布しており、全てが子どもにとっては大切であり、気を付けている点であるという結果が示された。保育経験が浅い保育者は、子どもが行事に取り組む姿勢を大切にし、5 年以上の保育者は、子どもの発達を考慮し、行事をきっかけに自信を持ち、もっと表現が豊かになることを期待しているのではないかと推察される。保育経験に関係なく、子どものことを考えている結果となっているのではないだろうか。

次に、行事の準備をするにあたって、子どもが考えた発想を取り入れることがあるかについての回答を得た。結果、保育歴に関係なく、最も子どもが考えた発想を取り入れることが多い行事は、「生活発表会」であった。保育者は子ども達が表現活動を楽しめるよう、子どもの意見を取り入れながら、行事に取り組んでいることが考えられる。子どもにとっても、自分の意見を組み込まれたことによって、楽しみながら表現活動に取り組めることであろう。行事において、「やらす」「やらされている」という先入観があったが、本研究によるアンケート調査の結果においては、保育者は子どもの意見を組み込み、子どもと一緒に行っている保育者の姿があることがわかった。しかし、なぜ「やらす」「やらされている」といった先入観が生じるのであろうか。保育者は、子どもと一緒につくり上げてきたものを、子どもがより上手く発表できるように、また思いが伝わるように、熱心な指導をしているのではないかと推察される。

そして、次に子どもにとって必要な表現の経験について回答を得た。ここで行ったアンケート調査の結果と自由記述の結果を合わせ見ると、保育歴5年未満の保育者にとっては、様々な経験が必要であるとの結果が示されたのであるが、5～10 年未満、及び 10 年以上の保育者からは、特別に何かが取り上げられるような経験はみられない。それに対し、5～10 年未満の保育者は「絵を描く」、「体を使って遊ぶ」の項目が飛びぬけ、特に注目されていることがわかった。そして、10 年以上の保育者にとっては、5～10 年未満の保育者より比較的満遍なく分布された調査結果が示されたのであるが、「役を演じる」ことと、「演奏をする」ことのポイントが下がるものとなっていた。全ての対象において、様々な経験を通して、子ども達に自信をつけてほしいとの願いが伺える結果となっているといえるだろう。

自由記述の結果から、子どもたちには様々な経験をしてほしいという思いが感じられた。いろいろな経験をすることによって、子どもの表現力が豊かになると考えられているのではなかろうか。子ども自身が自分らしく表現をすることより、保育者の思いが強いのではないかと推察していたが、保育者は子どもをよく観察し、子どもの意見を取り入れながら、表現力を高めようと考えていることが感じられた。保育現場では子どもの「主体性」を重視した表現がなされていると考えられる。行事においては、子どもからの意見を取り入れ、子どもから発信されたことが、よりうまく表現できるよう、そうした熱心な指導が時折、「させる」、「やらされている」といった先入観へとつながってしまう結果もありうるだろう。指導しながらも、子どもの表現

をくみ取りながら、そして、これらによる経験が子ども自身の自信に繋がり、より表現する力をつけてほしいという保育者の思いも見られる。保育者は、子ども自身が「したい」「やってみたい」と思い、自ら動きたいと思う意欲が育つような導きが大切だと考える。

引用文献

堂本真実子(2018)『保育内容領域表現　日々ワクワクを生きる子どもの表現』わかば社 p.140
厚生労働省(2017)『保育所保育指針〈平成 29 年告示〉』フレーベル館
文部科学省(2017)『幼稚園教育要領〈平成 29 年告示〉』フレーベル館
内閣府、文部科学省、厚生労働省(2017)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈平成 29 年告示〉』フレーベル館
鈴木みゆき・吉永早苗・志民一成・島田由紀子(2018)『保育内容　表現』 p.34